

< I >ROMカンパニー

▶UC0083.11.13

モニターの端を火箭が走った。

本来ならあるはずのない、前方からの攻撃——友軍であるアクシズ艦隊から攻撃が加わるはずがないのだ。

機体のモノアイを巡らせると、ジムⅡからの射撃を必死に回避するリックドムⅡが見えた。攻撃禁止ラインの向こうへと撤退するリックドムⅡの前方に回り込んだジムⅡが攻撃している。片腕が破壊され、武器も持たず、戦う意思のない者への攻撃——卑劣な連邦軍のいかにもやりそうなことだ。

ゲルググマリーネの右手に持たせたビームライフルを放った。一瞬の後にジムⅡは爆散した。

俺は自機をリックドムⅡに寄せ、左手でその肩をつかんだ。

「無事か？カリウス軍曹」

「 balan 少佐でしたか。助かりました」

“お肌のふれあい通信”で互いの無事を確認した。

「停戦ラインまでもう少しだ。気張れ」

「私は大丈夫ですが、推進剤がギリです」

「最後だ、使いきれ。切れたらあとは俺が引っ張ってやる」

改めてカリウスが搭乗するリックドムⅡの姿を確認する。左腕は肩ごと失い、背に負っているはずのヒートサーベルも無い。右肩や腰部アーマーなどにはビームの擦過傷がいくつも付き、一部は装甲が破壊されてフレームが剥き出しになっている。今日の激戦を潜り抜けたこいつも、生き延びる権利をもぎ取ったのだ。

マーカーブイが列を成して停戦ラインを作っている。その向こうにはアクシズの艦隊が生還した兵士を收容すべく待ち構えている。連邦との協定により停戦ラインを越えることはできない彼らには、一人でも多くの兵士が停戦ラインにたどり着けるよう祈ることしかできない。

ようやく停戦ラインを越えた瞬間、通信機が音を拾った。

「ぬお——っ！」

ガトーの雄叫びが聞こえ、その直後に大きな破碎音が響き、そしてブツッと通信が切れた。

「ガトー少佐！」

俺は思わず機体の踵を返させ飛び出そうとした。

そのゲルググマリーネの肩をリックドムⅡの右手がつかんだ。

「いけません、大尉！今から行っても…」

「まだわからないだろうっ」

「ガトー少佐の言葉を聞いていなかったのですか！生き延びることが少佐の望みです。少佐の決意をムダにさせはしない！」

リンケーインジケーターを見遣る。ガトーの搭乗するノイエ・ジールを示す〈AMN-02〉の文字は無かった。

「くそっ！——すまん、貴様の云うとおりだ」俺は推進ペダルにのせた足の力を抜いた。「だが、上官侮辱罪だぞ」

「生きて戻らなければ、軍法会議もかけられませんよ」

俺はマリーネのモノアイ越しに停戦ラインの向こうを見はるかした。まだそこかしこで光芒が生まれては消えていく。ノイエ・ジールの巨大なジオングリーンの機体が見えることは無かった。

▶UC0092.12.20

俺は目を覚ました。ここはMSキャリアーの運転室の中だ。
(またあの時の夢かー)
もう朝か。外が明るい。倒していた背もたれを戻したらドアの外から声を掛けられた。
「起きたか。うなされとったようだが、大丈夫か？」
同乗者のロッシュ・ザボスだ。昨日は空港からここまで長時間キャリアーを運転したのに、今日は疲れた色を見せない。60をとうに超えているのに、元気な爺さんだ。
「コーヒーでも飲むかね？」
「もらおう」
俺も外に出て、腰を伸ばす。昨日朝受領する予定だったMSコンテナの搬入が大幅に遅れたため、途中で車中泊を取ったのだ。熱いコーヒーを冷ましながらちびちび飲んでいると、ロッシュが話しかけてきた。
「ガトーと云っていたが、あの<ソロモンの悪夢>のことか？」
声に出してしまっていたのか。
「ああ。昔、ともに戦ったことがある」
昔と云ってもまだ10年も経っていない。
「ぬしも星の屑作戦に参加したのか？」
「なぜ、作戦名を知っている!？」
83年10月にエギーユ・デラーズ率いるデラーズ・フリートが決起し、連邦に反旗を翻した。ガトー少佐によるガンダム強奪から始まり、地球へのコロニー落としを実行して完遂した一連の軍事行動を、デラーズ・フリートでは星の屑作戦と名付けていた。
しかし、腐った連邦軍部は敗戦の事実を隠蔽するために、コロニーは事故による落下として公表。我々デラーズ・フリートの逆襲と切り離れたのだ。一般の市民の中ではデラーズ・フリートのことを知っている者は稀だろう。
「なに、わしらにはわしらの情報網があるのだよ。年の功、ってやつだ」
それにしても作戦名まで知っているとは、ただのジャンク屋ではなさそうだ。
「つか、飲むの遅おせえな。あとは、車の中で飲んでくれ。もう出るぞ」
「朝飯はどうすんだ？」
「途中、小さいが美味しい定食屋があって朝から開いている。そこに寄るつもりだ」
「了解。じゃあ、すまないが引き続き運転を頼む」俺にはキャリアーの運転経験がない。
「おう、任せろ」

ロッシュは小刻みにハンドルとアクセルを操作して白線で引かれた駐車スペースにピタリとキャリアーを収めた。
「さあ、着いたぞ。ここが我々の仕事場、ROMカンパニーだ」
キャリアーが止まりきる前から、建物から人が出てきた。総勢10人程度か。20代から50代まで年齢も格好もばらばらの男たちだが、60の後半以降であろう爺さん2人も混じっていた。そのうちの一人が年に似合わない大声を張り上げた。
「よっし、野郎ども、コンテナを下ろせ！ ベッドは3番だ！」
応！と答えて老人2人を除いた男たちが持ち場に散っていった。すでに暖気していたらしい大型クレーン車がアームを下ろすと、その先のワイヤーをコンテナの四隅に取り付ける。
「いいぞー」と一人が手を振ると、クレーンのアームが上がり、コンテナは宙吊りとなった。そのまま格納庫のように馬鹿でかい建物の

中に入ると、通称ベッドと呼ばれる作業台に乗せた。バチッと大きな音がしてワイヤーが外れると、クレーンは建屋の外に出ていった。

ベッドの床の一部がせり上がって肩や胸部、腰部、脛、足部などを固定した。

「OKで一す！」若い男の声がすると、一人がリモコンを操作したベッドは上部が起き上がっていく。ベッドを起こす2本の油圧ジャッキはおそろしく太い。

ベッドが完全に起き上がると、さっき大音声を張り上げた老人が寄ってきて云った。「じゃ、開けてくれ」

俺はジッパー付きポケットからカードキーを取り出すと、コンテナのスロットに差し込んだ。スロットの横のセンサーが光り、そこに指を広げた右手を当てる。プシュッと空気が漏れる音が響き、観音開きの扉が手前に開いていく。90度まで開いた扉はスライドしてコンテナの中に納まった。

「おー、高機動型ザクの前期型ですね」

「MS-06のR-1Aだな。変わったカラーリングだ」

「ばか、お前知らないのか」

「若い奴は知らんだろうよ。この緑と青で高機動型、つったらガトー少佐しかいねーだろうよ」

「ソロモンの悪夢!？」

「え、マジモン？」

古いも若きもやかましい。ガトー少佐はジオン軍人だろうと連邦だろうとかまわず有名人だ。ジオン軍人からは大義に殉じた歴戦の勇士として今でも畏怖をもって讃えられている。一方連邦の兵士にとっては2度にわたるソロモン戦と2本目のコロニー落として連邦に大打撃を与えた恐怖の対象であり、戦史の教本にも記されているらしい。

「ガトー少佐の名義で借りられた倉庫にあったから、まず本物だろうな」俺が説明すると、喧騒はさらに大きくなった。

「だーっ、うるせーな、話ができやしねえ。えっと、バレンタインさん」

「バレンタインだ。バランでいい」

「じゃあ、バランさん、こっちに来てくれ」

老人の一人に導かれて入った建物は事務所のようだった。

事務所に集ったのは、俺を含めて4人。ロッシュ・ザボスを除いた二人が自己紹介をした。

「わしはオルクリウス・オイゲンシュタイン。名前が長いから、皆のように〇2と呼んでくれてかまわん」と云ったのは、白髪白髯のご老体。豊かな白髯と反比例して白髪の方は耳の上にかろうじて残る程度だ。70は越えてると思われる。

「俺はマクシミリアン・シリウスだ。御多分に漏れず、マックスと呼ばれてるよ」ここにいる3人の中で一番若く、金髪も豊かだ。と云っても、60はかなり前に過ぎているようだ。予約のためにヴィジホンで話したのも彼だ。

シリウスという名には俺も所縁があるが、結構ありふれた姓だから彼とはおそらく無関係だろう。

「若いやつらはおいおいにな」

「ギーツ・カワサキ・バレンタインです。今回はよろしく頼みます」それぞれと握手を交わす。

「そんなご丁寧な言葉は挨拶だけでいいぞ。ここにいるのは大体軍人あがりばかりで、気にするやつはおらん」

「そうか。助かる」

「それにしても凄いものを持ち込んでくれたね。まさかガトー少佐のMSなんて」

「おれも最初に見たときはおどれーたよ」キャリアーに載せる前にコ

ンテナを開けて見せたとき、ロッシュはしばらく固まっていた。一目見て本物と見抜いたようだった。

「で、これをどうしたいんだ？」

「せめて今の時代で使えるくらいにはアップデートしたい。そうだな、ジェガンとやりあえるくらいでないとな」

「連邦のジェガンか。確かに制式採用されている中ではジェガンが最も新しいが」

「いや待て」ロッシュが口をはさんだ。「お前、連邦軍とやりあうつもりか」

「ああ、仕事でな」

「——シャア総帥か」挨拶以来無口だったO2がぼそりと云った。

「ああ、そうさ。シャア・アズナブルが総帥となってまた勢力が盛り返してはいるが、まだまだ兵が足りない」

「ネオ・ジオン——足りないって、戦争をするつもりか？」マックスが問う。

「スウィートウォーターという拠点も手に入れたしな。いつ挙兵してもおかしくはないな」ロッシュが云う。

「俺に云われてもそれは知らねえよ。所詮傭兵だ、作戦を細かく教えるはずがないだろう。まあちこちのPMSCに声を掛けてるのは事実だ」

PMSCとは、民間軍事警備会社(private military and security companies)の略称であり、俺はその一つであるセイリオスの契約社員である。

「お前さんの会社、セイリオスと云ったな」O2が声を掛けてきた。

「セイリオスというのは古代ギリシア語でな、シリウスの語源となっているのは、知っておったか？」

「シリウス——？」

その言葉はつい最近聞いた。ああ、そうだ。俺がマックスを見ると、わざとらしく明後日の方を向いている。

「おい、爺さん、マクシミリアン・シリウスと云ったな」

「70前を爺さんと呼ぶな！ シリウスなんて名字、そこら中に転がってるだろ」

「やっぱり、あのシリウスなのか？ シリウス・コーポレーションの関係者なのか？」

シリウス・コーポレーションはアナハイムエレクトロニクスに次ぐ軍需産業で、MS以外の武器や軍用車を作っている大企業だ。最近ではルオ商会としのぎを削っているらしい。セイリオスはそのシリウスグループの一員なのだ。もともとはシリウスのテスト部門だったのだが、独立してセイリオスを立ち上げた。無論100%シリウスの出資会社だ。

「会社はとっくに身を引いている。今はただのジャンク屋のおやじだ。ってかO2、なにいきなりバラしてんだよ！」

ばんっ！

と、いきなりテーブルが大きな音を立てた。見ると、ロッシュがその大きな手をテーブルに叩きつけていた。

「いーかげん、本題に戻りたいんだが」

「おう、進めてくれ」俺も追随する。このまま放っておいたらいつまで経っても話が進まん。

「ジェガンに匹敵するようになってことだが、核融合炉はそっくり取り替えないといかんぞ。関節も今のままじゃな。——予算は？」

俺は一枚のカードをテーブルに放った。「2億はあるはずだ。足りなければ云ってくれ」

PMSCはリスクが高い分、どこも給料は高額になる。俺は酒も煙草もやらないし、ガトー少佐が借りていた倉庫には金塊がいくつか

入っていたので、ありがたく使わせてもらうことにした。核融合炉を交換するのも想定内だ。

「納期は？」

「さっきの話の通り、いつ宣戦布告するかもわからんから、できる限り急いでほしい」

「うむ、核融合炉をまるっと交換となると、テストもしなければならんし、そもそもすぐ入手できるかもわからんからな……」

「まあ、なんとか頼む。ところで元ジオニック社の技術者がいる、というからここに来たんだが、何人いるんだ？」

ジオニック社は元ジオン公国において、ザクを始め数々のMSを作り上げたが、1年戦争の後に解体され、技術と人はアナハイムが接收した。ジオニックとアナハイムの技術が融合してできたのが、グリプス戦役前期で活躍したハイザックだ。

だが、ジオニックが解体されてから10年以上が経つ。全部が全部アナハイムに入ったわけではなく、エンジニアも散り散りになっている。このROMカンパニーにしてもいて一人か二人と思っていたが。

「おれら3人は皆そうだ。他に2人いたかな」

「マジか。頼りがいがあるじゃねえか」

「おれらもザクをいじるのは久しぶりだから楽しみだ」

「じゃあ、改めて頼む」

「おう、任せろ」

ロッシュと握手を交わした。

「それにしても、どこでこんな逸品を手に入れたんだ？ —— 無論云いたくなければ無理には訊かんが」

「ガトーの部下だったやつから譲り受けたものだ」

▶ UC0086.8.1

「こいつの中身を確認したいんだが」

倉庫会社の受付で、俺はカードキーを差し出した。受付の若い女性はカードキーをカードリーダーに載せ、端末を操作して云った。

「地下2階に降りていただき、左に進まれるとC通路と書かれた入り口があります。C通路に入って3つ目がお客様の倉庫になります。

キーのリーダーは右手側にあります」

「了解。ありがとう」

返されたカードキーを受け取り、説明通りに進んだ。3つ目と云っても一つ一つがでかいから5、60mあることになる。通路の入り口に立位型電動二輪車があったのは、奥の倉庫に行くためのものか。

扉にC-3と大書されたコンテナの前に立つ。左右幅30m、高さも30mくらいか。リーダーにカードキーをかざすと扉というよりシャッターが上にせりあがっていく。俺が通れるくらいまで上がったところでシャッターの動きを止めた。コンテナの中に入ると、センサーが察知したのか自動的に照明が点いた。シャッターの内側にあるボタンの一つを押すと、シャッターの先から黒くて薄い膜が伸び、床に届いたところで止まった。こうしておけば外から覗かれる心配がない。

振り返ると、MSベッドの威容があった。こいつが置けるということは、コンテナの奥行きは20m以上あるということだ。ベッドの電源を入れてみると、操作パネルが灯った。電気は通じているらしい。パネルの表示を操作してベッドを立ち上げさせた。

高機動型ザクの前期型、MS-06 R-1A。俺も使ったことのある量産機の名作だ。特別なのはそのカラーリングだ。俺はそのカラーリングを別の機体で見たことがある。

青と緑と白の3色で塗り分けられた機体はアナベル・ガトーのパーソナルカラーとして敵味方に知られる。

ガトーは個人的に機体を受領していたのだろうか？ ア・バオア・クーの時はゲルググに乗っていた。ソロモンの時はリックドムだったはずだ。これはさらにその前に使っていたものなんだろう。

よく見るとザクは胸部や腕部、脚部など何箇所かベッドに留められている。背部はベッドに密着しているので、バックパックは外しているということだ。ベッドの基台の傍らにある、ブルーシートがかけられた大きな塊がそれだろう。近寄ってブルーシートの端をめくってみる。思った通りだった。

それにしても傷一つないきれいな機体だ。もしかして一度も被弾していないのかもしれない。宇宙で活動すれば移動にしろ戦闘にしろ浮遊している大小様々なデブリで擦過傷が付くのは避けられないが、その程度の傷ならば丁寧に磨いてやれば修復できる。

ガトー本人が磨いたのか整備士にやらせたのかは分からないが、MSへの愛情を感じる。

ほかに何があるかと見回す。制式武装のマシンガンを始め、武器類が全くないが、こういう貸倉庫では武器類の預かりを制限するのはよくあることだ。

ほかに目につくものと云ったら、グレーのキャビネットが一つあるくらいだ。高さは俺の身長と同じくらい。観音開きの扉を開けてみた。

照明の照度が一段上がったかと思った。中に入っていたものが光を反射しまばゆく輝いていたのだ。

それは金塊——金のインゴットだった。ざっと見渡しただけで10本以上ある。現在、金の相場はいくらくらいだったか。とにかく、1本でもひと財産だ。

「あいつ——何者だったんだよ」扉を閉めながら一人ごちる。

まあ、なんにせよ、MSも金塊も今は必要ないものだ。だが、ザクはともかく金塊はいつか必ず必要になる。ありがたくいただいておこう。あとでカリウスにも教えてやらないとな。

帰るため受付を通り過ぎようとする、「あ、あの」と呼び止められた。振り返るとさっきの受付の女性がカウンターの中で立っていた。

「あの——アナベル・ガトーさん？ ……ですか？」

「ああ、いや俺は違うよ。代理の者だ」

「ガトーさんってあの、『ソロモンの悪夢』のガトーさんですよね」

「そうだが……知り合いか？」

「いえ、そんな滅相もない。ただの一方的なファンでした」

「ファン？」

「はい。強くてクールでイケメンで。ずっと推してたんです。コロニー事故に巻き込まれて亡くなったって本当なんですか？」

コロニー事故に巻き込まれて——か。連邦の情報操作は行き届いているな。

辺りを見回して防犯カメラを見つけ、その死角に回り込んで口の動きを隠しながら小声で受付嬢に告げる。

「きみだけは真実を知っておいてくれ。実はな、あれはコロニー事故ではなく、ジオンの残党が落としたやつなんだよ」

受付嬢は目を瞠ったが、何も云わずに頷いた。下手に騒ぎ立てたりしない、賢い娘のようだ。

「ジオン残党による反攻作戦があったんだよ。作戦は成功したが、連邦軍の情報操作でコロニー事故ってことにされちまってるがな」

「じゃあ、ガトー少佐は……」

「事故ではなく、その作戦で戦死した。多くの仲間を守ってな」

「そうなんですね……わたし、周りのみんなにも伝えます！」

「憲兵に見付からないように気を付けな」そしてあることに気付いた。「ところで、まだ保管されてるってことは、倉庫代を前払いされているようだが、いつまでなんだい？」
「少々お待ちください」彼女は端末を操作する。「99年の12月末日までです」
「了解した。じゃ、それまでにはまた来るよ」
「はい、お待ちしております」
カウンターを離れてドアに向かう俺に声が届く。「良ければお名前を——」
俺は振り返らずに後ろ手に手を振っただけで出入り口のドアをくぐった。元ジオン軍人の知り合いなんていない方がいい。

▶UC0092.12.20

「ところで、腹が減ったな」とマックスが云い、
「おう、もう昼時か」とロッシュが応えた。
そこでドアが開き、一人の女が入ってきた。
「話は終わった？」
背の高い女だった。俺の目の高さに頭頂が見える。180近くあるんじゃないか。
「こちらがお客様？——ジュナ・ザボスと云います」
若いとは思ったが、童顔すぎて年齢が分からない。それに声もどちらかという幼い方だ。
「ザボスって、ロッシュの娘さん？」
「孫だ。まだ11だからな。手出したら殺すぞ」
「11!?!」
「11歳でこの身長って、育ちが良いどころじゃないぞ。——まさか。ルナリアンか？」
「おー、よくわかったねえ」
ルナリアン——スペースノイドでもアースノイドでもない第3の人種と云われる彼らは、月で生まれ育った者たちだ。月の低重力で育つため縦に伸びやすく、平均身長が高い。一方で筋肉が付きにくく、1G区画では1時間とられないらしい。
「いや、しかし——」ルナリアンには前にも会ったことはある。しかし。「ルナリアンって、もう少し全体的に線が細かったような」
「てめえ、うちの孫がデブだと云いてえのか！」
「そんなこた云ってねえ！これのどこがデブなんだよ。ってかお前、孫絡むと性格変わるな!?!」
「へっへー。あたし鍛えてるからね。加圧トレーニングもやってるし」
「そうだったのか。いや、すまん、俺の偏見だったようだ」
「まあ、細い人が多いのは事実だし」
「なぜ、わざわざ鍛えてるんだ？」
「そりゃまあ、1Gエリアでも自由に動き回りたいし、あたしさ、地球に行ってみたいんだよね。お客さんは地球に行ったことある？」
「ギーツ・K・バランタインだ。グリプス戦役の後始末でカラバに協力するために降りたな、地球は」
「ね、ね、地球ってどんなところ？」
「そうだな——」
「おい、そんな話は後にして、さっさと昼めし食おうぜ」マックスが腹に手を当てながら云う。
「昼飯はいつもどうしてるんだ？」
「うちにゃ腕のいい料理人がいるんだよ。ほら、食堂行くぞ」

食堂とは云ってもメニューは1種類だけだった。まあ寮食と思えば当たり前か。俺には分からない中華風の炒め物を主菜とした定食で、パンか白米かを選ぶ。普段は主食はパンだが、中華風か日本風の時は白米も提供しているらしい。

その辺のところを教えてくれたのは、俺の前に席を取って色々話しかけてきたケニーという15歳の少年だった。俺の部屋を使えるように片せと云い遣っていたのを思い出し、礼を云う。

「いいっていいって。それよりさ、あの[ソロモンの悪夢]と一緒に戦ってたんだろ？」

「デラズ紛争の最後の時だけだな」

「そもそもどうやって会ったのさ。PMSCって軍の上層部とも会えるの？」

「いや、その時は俺はまだジオン軍にいたのさ」

「え、元々ジオン兵だったの？」ケニーの隣にいた少年が尋ねた。

答えようとしたが、いつの間にか集まった少年や男たちから口々に質問を浴びせられた。

「MS乗りだったの？」「なに乘ってたの？」「[ソロモンの悪夢]ってやっぱ強かったんだろ」「連邦の[白い悪魔]には会った？」「地球上で戦ったことはあるのか？」

「だーっ。一遍に質問するんじゃないやねえ！ マックス、昼休憩は何時までだ？」

「昼休憩は12時半から13時半までだ」

「じゃあ、まだ30分はあるな。それまでだからな」

「じゃさ、じゃあさ」

「その前に——」不意に女のドスの効いた声が響いた。食堂のおばちゃんことサマンサの声だった。「食ったんなら、さっさと食器を下げる！」

うわっと云いながらみな食ってた席に戻るとトレイをもって下膳口に列を作った。そういうシステムか。俺も列の最後尾についた。

元の席に座ろうとすると、長テーブルの中央に連れてこられた。

ケニーはちゃっかりと俺の前を陣取っている。

「じゃ、まずはお前の最初の質問からだな。ガトー少佐と初めて会ったときか？」

「うん！」

「アナベル・ガトーに会ったのはア・バオア・クー防衛戦だった——」

▶UC0079.12.31

俺はその時ア・バオア・クー防衛隊に所属していたが、すでに隊長を始め半数以上が撃破されて隊としての体は成していなかった。

連邦軍の圧倒的な物量に押され、敗色は濃厚になっていく。学徒動員まで行っているらしいが、それでも物量差は碌に縮まらない。先にMSを開発したジオン兵の方が操縦技術に一日の長があったが、それもソロモン戦あたりでは連邦軍の技量に追いつかれている感があった。

『おい、ギーツ、生きてるか』通信機から聞こえた声は、同じ防衛隊の同僚、ハインツのものだった。この辺はミノフスキー粒子が濃くないのか、音声だけなら通信も可能らしい。

「ハインツこそ無事——」施設の陰から現れた高機動型ザクを見て、二の句が継げなかった。左腕は肩のパーツごと失われており、右ひざや腹部からはスパークが飛び散っている。

『まだ大丈夫だ。それより聞いたか？ 別のフィールドでは敵の揚陸艦に取りつかれたらしいぞ。それもどうやらあの[木馬]らしい』

「そうか。とりあえずお前は下がれ。腹の傷、ヤバいんじゃないか？」

『整備場に戻ったところで、修理する暇とパーツがあるかどうか』

1本の光条を見た気がした。次の瞬間、目の前のザクが爆散した。

なんだ！？

いきなりのもので思考が飛ぶ。その刹那コクピットを激しい衝撃が襲った。視界の隅のモニターに映った白い影を見ておれはやっと事態を把握した。

連邦の白い悪魔！

奴の攻撃がシールドに当たったのは僥倖でしかない。しかもシールドであるのに半壊している。戦艦の主砲並みというのは、誇張ではなかったのだ。

「くっ！」

考える前に体が動いていた。2射目をギリギリにかわす。このR-1Aタイプだからかわせたのだ。

反撃しようとザクマシンガンを連射するが、奴のシールドは傷すらついていないように見える。くそっ、やはりゲルググに乗り換えておけばよかったのか？

3射目で左腕を持っていかれた。しかしまだ致命傷には至っていない。

直撃を避ける俺に業を煮やしたのか、白い悪魔はビームサーベルを抜いて突撃してきた。俺は迎え撃とうとマシンガンを放り捨ててヒートホークを構えたが、これで対抗できるのか？

だが、接敵5秒前に奴は急制動をかけた。足裏からの噴射炎が俺の機体の前面を舐める。その勢いのまま奴は距離を開けた。その刹那、5本の光条が眼前を横切った。

味方の援軍か？ でもゲルググのビームライフルの威力をはるかに超えているように見えたが…いずれにせよ、この不意の攻撃を奴は察知したのか？

奴はビームの発射元の方角に向かって飛び去った。まるで俺の存在を忘れてしまったかのようなのだ。

フッと息をつき、呼吸を止めていたことを自覚した。背中が冷たいのは冷や汗をかいたせいだ。

あれがニュータイプだと噂もある連邦の白い悪魔か——あのビームのおかげで俺は生き延びることができたようだ。

武器を捨ててしまったし、左腕もいつ爆発するか分からない状態では、防衛任務もままならない。一旦整備場に戻ることにした。

整備士の話では、ザクの腕パーツの予備は無いとのことだった。「ザクが無いならゲルググの腕でもいいよ」と半ば自棄になって云ってみた。

「ああ、ゲルググの腕ならあるぜ」中年の整備士はニカッ笑って云った。

「できるのか！？」

「ゲルググも基本設計はジオニックだからな。何とかなるんじゃないか。不格好だろうけどよ」

「カッコなんざどうでもいい。やってくれ」

「かまわないが、そこまでして再出撃したいのか？ この要塞、もう駄目だぜ」

「エンブレム見ただろう。俺は防衛隊なんだ。ぎりぎりまで防衛するのが俺たちの仕事だ。だからおっさんも自分の仕事頼むぜ」

「まだおっさんじゃねえ。カークランドだ、バルンティン大尉」

俺の名と階級は整備場に入るときに告げている。カークランドは

それを覚えていてくれたみたいだ。
「バランでいいよ。じゃあカークランド、頼んだ」

整備を待つ間、コクピットに持ち込む飲料水を補充するために給水所に行ってみた。幸いなことにこの水道設備はまだ生きていたので、パックを水で満たす。整備場に戻ろうと向かっていると、パイロットスーツを着た一群の男たちに行き会った。

「聞いたか？ ギレン総帥が死んだって」
「本当か？ 指令室まで敵が来たのか？」
「おれが聞いたのは、撃たれて殺されたって、味方に」
「味方に！？」

そこで男が声を潜めたので、俺は耳をそばだてた。
「それが、キシリア中将らしい」
「マジか！？ それじゃ、あの女が指揮を執るのか？」
「こりゃ、いよいよやべえな。脱出したほうがいいんじゃないか」
「脱出して、どこにだよ」

俺はその場を離れた。ここに来てザビ家の内紛とはな。奴らがどうなるかと知ったことじゃない。俺は俺の仕事をするだけだ。

整備場に戻ると、俺のザクは推進剤のタンクを交換しているところだった。ザクに取り付けたゲルググの腕はちぐはぐ感が半端ないが、無いよりマシだ。
「おお、ちょうどよかったぜ。カラーリングはどうするよ？」カークランドが声を掛けてきた。

「ままでいい。あと何分だ？」
「今タンクを交換して、後は外装を付けるだけだから、15分ってところか」
「10分でやってくれ。状況が分からんから5分が命取りになるかもしれん。おまえ達も脱出した方がいいぞ」
「脱出してもどこに行きゃいいんだよ」
「とにかく全員にノーマルスーツを着させてくれ。あとで迎えに来る」
「それじゃおまえは生きて戻ってくるってことだな」

さすがにそんな確約はできない。
「もし俺が戻らなかったら、とにかく要塞から離れて近くにいる戦艦に向かえ。ランチくらいはあるんだろう。それもできなかつたら白旗を揚げろ。とにかく生き延びることだ」
「おまえもだぜ。本国に戻ったらいっぱいおごってやるよ」
「じゃ、後でな」

俺は床を蹴ってコクピットハッチに取り付き、コクピットに入った。取り替えたタンクが問題なく接続されたことを確認すると電源を入れ、計器類をチェックする。軽い振動に襲われ、外装が取り付けられたことを知る。

通信機のランプが点り、カークランドの声が聞こえた。「OKだ。グッドラック」敬礼しているカークランドや整備士達に敬礼を返すと、コクピットハッチを閉じ、メインエンジンを起動させた。軽く床を蹴らせて微速で整備場に隣接する射出口カタパルトに向かう。

「え、今から出るのかよ」カタパルトの要員が驚いた声を出すので答えてやった。「俺は防衛隊だからな。最後まで防衛する義務がある。貴官らは俺を出したら脱出しろ」
「OK。グッドラック！」
「バランタイン、06-R-1A、出撃する！」

再出撃して30分経ったかどうか、通信機が声を発した。ミノフスキー粒子が濃いこの辺りで通信が繋がるということはかなり近くに相手がいるということだ。

『こちらは宇宙軍第3大隊のガトー大尉である。貴官の姓名と階級を明らかにせよ』

「ア・バオア・クー防衛隊のバルンティン大尉だ」

『貴官がああ灰色の嵐[グレイストーム]か。先刻から奮戦ぶりを見せてもらったが、さすがだ』

「[ソロモンの悪夢]に褒められるとはね」

『ここはもう無理だ。貴官も脱出しろ』

「俺は防衛隊だ。全員が脱出するまで守る義務がある」

『見上げた意気だが、ここで殉じたらそれで終わりだ。それよりも時期を見て捲土重来を図るべきだ。貴官のような腕のあるパイロットはこの先も必要なのだ』

「この先——だが、脱出と云っても本国に戻れるのか？」

『本国は——もう、無くなる』

「何を云っているんだ？ まだ本土決戦で巻き返せる。総帥は死んだらしいが、キシリア中將は存命だろう」

『ジオン共和国を名乗る輩が政権を奪取したそうだ。奴らは停戦をするつもりだ』

「な……停戦……誰がそんなことを！」

『デラズ大佐だ。私も大佐に命を救われた。大佐が我らを導いてくれる。必ずジオンの栄光を取り戻す』

エギーユ・デラズの名は知っている。会ったことは無いが、宇宙軍内で智將として知られる男だ。

『行くぞ。グワデンが待っている』

「グワデン？」

『グワジン級だ。大佐が艦長を務めている』

「待て、俺一人では行けん。奥にメカニックの連中がいるんだ。彼らだって必要だろう」

『いや、彼らこそ必要だ。私も行こう』

カークランドらは2機のランチを調達していた。それらに分乗したメカニックらを連れ、ガトーの先導でなんとかグワデンにたどり着いたのだった。

十分後、俺たちは艦橋にいた。

「デラズ大佐、バルンティン大尉をお連れしました」長身で頭身も高いガトーは敬礼姿がサマになる。

「おお、貴官がああ灰色の嵐か」

「ギーツ・カワサキ・バルンティン大尉であります。この度は生き延びる道を示していただき、誠にありがとうございます。可能であれば大佐殿の麾下として働く所存です」俺も敬礼しながら挨拶をする。

「こちらこそ貴官の力を借りられるのは幸甚である。いつか——いや、ガトーも聞け——3年だ。3年のうちに我は連邦に対し反撃の狼煙を上げる。その時の尽力とそれまでの精励を期待する」

「は！旗揚げの際には粉骨砕身、この身をお使いください」

「微力を尽くします」ガトーに続いて俺も応えたが、陳腐なセリフになってしまった。

正直、この時の俺はたった3年で連邦に対抗するだけの兵力をそろえられるとは思っていなかった。

「それで、この後はいかがなされるおつもりですか」俺にはカークランドらに説明する義務があるので、訊かないわけにはいかなかった。

「うむ、我らは[茨の薊]に向かう」

「茨の薊——」

「旧サイド5に大佐が建設した我らの基地だ」ガトーが説明してくれた。「今はデブリが集積して暗礁宙域となっている——とは云え無

論私も行ったことはない」

「なるほど。そこなら連邦の目をくらませられるのだな」

「まだ建設の途中だ。貴官らにも力を借りたい」

「我らの基地になるなら、自分の家を建てるようなものです。むしろ率先して造らせていただきます」基地建設に大きな功績を残せば、借りを返したことになるだろう。

「貴官は軽く考えすぎではないのか。家を建てるのとはわけが違うぞ」

「はっはっは。モノ作りは得意だ。任せたまえ」俺は胸を張って云ってやった。

「モノという規模ではないのだがな——」

ガトーがため息をついたようだったが、俺は知らぬふりを決め込んだのだった。

▶UC0092.12.22

「じゃあ中佐あ、外してくだせえ！」

技術主任であるセルゲイの胴間声に従い、コックピットに入った俺はセットアウトのボタンを押した。バチンという音に続いてガコツという音が両脇から響く。これでバックパックの制御ケーブルと動力パイプが外れたことになる。この作業は機体の外からもできなくはないが、手順がめんどろなためコックピットで操作したほうが早いのだ。それも電気系統が生きていたからこそその賜物だ。

セルゲイはメンテナンス一筋35年の大ベテランで、小は立位型二輪車から大はコロニーまで手掛けたという。そういうことはケニーが率先して説明してくれた。

「よし、サム、2m上げろ。そのあと3mバックだ」クレーン車を操縦するサミュエルに細かい指示を出すセルゲイの声を聞きながら、俺はコックピットから這い出た。

ザクの背から外されたバックパックがゆっくりと床に降ろされていくのを見下ろす。思ったほど汚れも傷みもない。敵に背は見せない——背を向けて逃げたりしない、というサムライの気構えを持つ奴だった。

当時最新鋭だったバックパックだったが、それも14年前の話だ。連邦の量産機とは云え、ジェガンは高スペックの新鋭機だ。このままの推力では追い付かないだろう。大幅な改修が必要だ。

サミュエルはクレーンのアームを器用に動かしてバックパックを寝かせた。何人かの男が取りつき、工場のクレーンを引っかけていく。

「よし、いいぞ、上げてくれ」下の男の一人が上に向かって声を掛けた。キャットウォークにいた若い男は「りょーかい」と軽い口調で答えながら手元のリモコンを操作する。4本の鎖で吊るされたバックパックは立てた状態で安置された。

それを見ている間に、ザクは両腕を外されていた。

地上に降りたところで、ちょうどロッシュが通りかかったので、俺は要望を伝えることにした。

「ロッシュ、腕か胸に機銃を付けたいんだが。ミサイルを撃ち落とすのにいちいちマシンガンを使ってたらすぐ弾切れになっちゃう」

「弾幕を張りたい、ってことか。じゃあ弾倉も必要だな。かなりのサイズの」

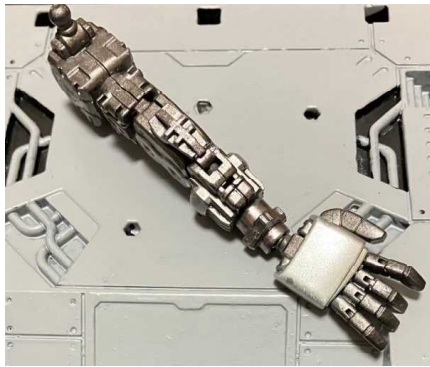
「そうなるよなあ。使い終わった弾倉は外せると身軽になって良い」

「まあ、ちょっと考えてみるさ。まずジェネレーターが決まらないとサイズも分からんからな。スペースがどれだけ空くんだか」

「ジェネレーターはO2が当たってるんだったか？」

「ああ、O2は顔が広いからな。いいブツを見付けてくるだろうよ」
ジェネレーターとは発電機のこと、MSが必要とする莫大な電気を
作るために核融合炉を搭載するのがすでに伝統となっている。
「外部から電力を供給できると便利なんだがな。母艦からとか」
「マイクロウェーブ送信とかか？」ロッシュは一旦笑ったが、不意に
真剣な表情になった。「——いや、面白いかもしれんな」
ロッシュは考え込み始めてしまったので、俺はザクの解体状況を見
ることにした。

「パウルたちは腕の外装を剥ぎ取れ！サム、次は頭部だ」
「OK！」
「合点」
「サビ取り剤、こんなんじゃ足りねえぞ。もっと持って来い！」
「この高圧洗浄機こわれてんじゃねえか。誰か倉庫から予備を持って
来てくれ」
セルゲイの指示と職人たちの掛け合いに交ざって洗浄や研磨の
音が響き始めたので、整備場内は喧騒に包まれている。
「ははっ、これだけ賑やかなのも久しぶりだ」いつの間にか近くに
いたマックスが云った。隆々たる筋肉を見せつけるように上半身はタ
ンクトップ1枚の姿だ。とても60過ぎの肉体には見えない。「最近し
けた仕事ばかりだったからな」
「これがフルメンバーか？」整備場に出ている職人は6人だ。
「そうだ。立て続けに3人辞めちまってな。昨日のうちに求人を出し
ておいた。こいつを期限内に仕上げらば、6人じゃ足らん」
「すまないな。ネオジオンの上層部はどういうつもりでいるのか、全
然情報が降りてこないからな」
「中佐殿なら軍内でも上の方だろう。今のネオジオンは高級将校と
かは碌にいないはずだ」
「俺は派遣されただけだし、軍は辞めているからな。あくまでも外様
だ。それよりも求人の反応はどうだったんだ？」
「今朝一番で一人応募があつてな、午後に面接だ」
「反応が速いな。今働き口は少ないのか？」
「月ではあまり、な。新しい市を造るって話はあるから、それが始ま
れば仕事はいくらでもあるんだろうがよ」
現在の月面都市はフォン・ブラウン・シティとグラナダの二つだけ
だし、グラナダは軍事基地としての側面があるから住民はほぼ軍と
工場の関係者とその家族となっている。第3の都市を作るとい
う話は何度か持ち上がっているが、その度に戦争や紛争が起こって
立ち消えとなっていた。
「シャア総帥はスペースノイドの味方と標榜しているから、月を攻撃
することはないと思うがな」あまり慰めにならなそうなことを云
ってみた。
「そうだとしてもいざコトが始まれば、連邦も都市開発なんてやっ
てる暇は無くなるだろうさ。やれやれ、世知辛い世の中だぜ」
「まあ、その場合は俺が少しでも早く終わらせるさ」
「へっ、期待してるぜ」



ザクの腕の外装は2時間足らずで全て剥がされた。

「おう、案外きれいじゃねえか」セルゲイが云う。

「思ったより錆も少ないですね」パウルが応えた。パウルは確か四十間近の男で、他の連中と違って作業着をきちんと首元までジッパーを上げている。元々ジオニック社に勤めていて、アナハイム・エレクトロニクスに接收された後も数年アナハイムで働いていた。が、アナハイムの環境にどうしても馴染めず、転職を考えていた時にROMカンパニーの求人広告が目に入ったのが運の尽きだった。以来、ROMカンパニーの中間管理職としてジオ

ニック仕込みの腕を振るっているとのことだ。この辺の情報源は勿論ケニーである。

「関節の確認をする。ヒジ関節だけ通電しろ」

若い連中がテキパキと動き、大型のバッテリーと制御盤を腕部に繋げた。これは左腕のようだ。

「通電、OKっす！」若者の一人が報じた。

「よし、ヒジを曲げていけ。ゆっくりとな」

工場の床の上で横向きにおかれた腕だけが自動で動く様はなかなかシュールだった。外装による制限がない状態では、180度近くまで曲げることができる。伸ばした時には見えないシリンダーも露出していた。

